

「モンゴル学」 杉山正明

対談は、5月2日（火）午後1時から1時間半ほど、京都大学文学部にある杉山の個人研究室でおこなわれた。

話は、内陸アジアやイスラーム世界にとどまらず、東は日本から西はヨーロッパまで、時代をこえて多岐多様にわたった（わたりすぎた？）。その逐一をここに録することは、とうてい無理であり、ごく一部分だけを抜き出して掲載させていただくことにした。それでも、かなりの紙幅を費やす結果となった。この点、みなさまの御了解をいただければ幸いと存じます。なお、掲載分については、なるべく対談のまま再録するよう心掛けた。（杉山正明）

上山 あなたの『遊牧民から見た世界史』を見ていて非常におもしろいと思ったのは、例えば、ヘロドトスの『歴史』に触れていて、その中にペルシアの王様のダレイオスが登場しますね。そして、民主制と君主制の比較を述べて、どちらを選択するかということで、おれは君主制を選択するというふうなことを言っています。その議論の展開はプラトンの『ノモイ』なんかで議論されているようなものを踏まえた上で、ちゃんとリーズナブルに結論を出しているわけですね。『ノモイ』では、ペルシアをモナーキーの典型、アテナイをデモクラシーの典型と見立てた上で、二つの制度の混合体制に、実現可能な目標を設定しているのですが、こうした議論と対比できるような論法で、ダレイオスは君主制を選ぶということを言っているわけね。ヘロドトスの『歴史』はギリシア側から見た一つの世界像なのでしょうけれど、その中で結構共通のベースを持って考えているという感じですね。

杉山 そのペルシア対ギリシアというのは戦争をしちゃいましたから。

上山 そうそう。それでギリシアは勝ったりしているからね。

杉山 後世は非常に対立的に考えてしまうのでしょうかけれど、本当にそうだったかどうかは……。

上山 その辺はあなたが再検討の必要を提案されているような今までの世界史の見方ね。例えば、ヘーゲルなんかだと非常に大きな、ある意味で当時の知識人の常識や何かも含めて、そういうものを集約したイメージなのでしょうけれど、やっぱりまじな歴史はギリシアから始まるんですね。オリエンは君主以外に自由がない。そしてギリシアで自由が生れてゲルマンで自由が頂点に達する。ペルシアというのはその枠の外だね。しかも出発点

のギリシアと対立しているというイメージでネガティブな方向へ行くと思うんですね。例えば、丸山眞男さんのように非常に広い視野を持った人でも、そういうイメージにはぴったりはまり込んでしまっているように見えます。だから、あなたのこの『遊牧民から見た世界史』で言っていることは大変なことだと思う。ある意味で、みんながはまり込んでいるところを揺さぶろうというわけだからね。はまり込んでしまった人が驚くと思う。そこから、揺さぶられることを愉快だと思う人と、不愉快だと思う人ははっきり分かれる。若い人は、聞きあきたことから逃れたいから愉快に思う人が多いかもしれない。怠慢な若者というのは覚え込んでしまったものにしがみついていたから問題にならないけれど。これは相当アピールの多い本だと思いましたね。いろんな意味で。

杉山 先生、杉山はけしからんとおっしゃっていいんですよ。

上山 そんなことはないですよ。例えば、梅棹忠夫さんが『文明の生態史観』という本を出して、ユーラシア大陸を第一地域と第二地域に分けました。それがあなたの見方とある意味でつながるのは、乾燥した第二地域と湿潤な第一地域、砂漠と森というふうにやったわけですね。ところが、第二地域からは破壊のエネルギーがわき出してくるというふうに見てしまったわけ。

杉山 まあ、しょうがないですよ。

上山 しかし、これは今のみんなの通念を正直に表していると思うの。

杉山 そのとおりですね。

上山 日本人はあれは気持ちいいわけ。ヨーロッパと同じにしてもらえたと。一等席に座らせてもらったと。しかし、あそこで問題なのは第二地域という中にまだ二つ

あるわけですね。大きな、流動するところと、定着したところと。そのダイナミズムをちゃんと見ていくと、遊牧地域から出てくるのは単なる破壊のエネルギーだろうかというクエスチョンがあるわけね。

杉山 違うと思います。

上山 だから、梅棹さんの問題提起というのは、トインビーを彼なりに受け止めてああいうふう展開したのは、それはそれなりにある意味で今までの世界史というものをどこかで手堅く踏まえてしまっているところが……。

杉山 それは踏まえておられますね。

上山 そういう意味では、あなたの問題提起というのは新しい次元の問題提起だし、新しい歴史資料との付き合いの中から生まれてきたということですね。

杉山 ただ、先生。やはり常に、人も、思想も時代の子ですから、19世紀の西欧がすごかった時代の西欧のまなざしとか欧米のまなざしでいるんなものがストーリー化されてきたのは避けがたいことだったと思います。

上山 当然ですね。

杉山 今度は逆に、僕も含めた、これからやっていこうとする人間が、それとはちょっと違うような見方が多少できるとすれば、それはやっぱり国際情勢の変化があります。特にここ10年ぐらいでソ連が崩壊したりして、それこそ東と西の間の地域の根本史料が壁を超えて投げ出されているわけですね。

上山 ああ、そうか。それはすごいことだね。

杉山 すごいことですよ。

上山 何よりも大きいソ連解体の副産物だね。

杉山 そうです。世界史というのは実はこれからじゃないかなという感じがします。研究そのものが。

上山 それと直接はつながらないのですが、あなたの本を読んでいたら、『集史』という、あれはペルシア語で書かれているんですか。これを見て、僕は驚いた。その構造というかね。

杉山 率直に、すごいものですね。

上山 あれは主体はモンゴルですか。

杉山 二つに分かれていまして、第一部がモンゴル帝国の形成史なんです。こちらが主で、第二部が世界諸種族史、こちらはおまけのようなものです。

上山 いや、編纂の主体は。

杉山 ああ、すいません。主体は、モンゴルです。それも、国家編纂です。

上山 それでいて、自分のところだけの問題じゃなくて、イスラエルだとか、イスラームだとか、チャイナとか、いろいろ扱っているわけだね。

杉山 インドとかヨーロッパも扱っていますね。

上山 これはある意味で、比較古典学といえますか、そういうものの原型みたいな感じがしたなあ。それは翻訳すると大変なんですか。

杉山 いや、先生、いま僕は結局それをやっているんです。

上山 ああ、そうか。それはもうぜひともやってほしいと思ったの。要約でもいいから、これを見たいと思って。

杉山 いや、実は西欧は大したもの、1830年代にすでにフランスのカトルメール(É. Quatremère, *Histoire des mongols de la perse*, Paris 1836)というのがやり出しているんです。

上山 1830年代に？

杉山 ええ。30年代です。

上山 それは全訳？

杉山 いや、ごく一部分を扱っているだけなんです。

上山 ああ、そうか。全体では、どれくらいあるんですか。

杉山 これまでいるんな人がごく一部分ずつをやっています。フランス、ロシア、イギリスをはじめ、ヨーロッパ各国、世界各国が競争する状態になったんですね。それでいるんなものが出たのですけれども、特にソ連治下でそこそこまとまって、大体あらかた大ざっぱな仕事がされたんです。ただし、『集史』研究は、それこそまさに古典学でして、すべてそれぞれが、もとづく多種多様な写本が、しかもバラバラにあるわけですよ。

上山 どこにあるんですか。

杉山 世界各地に散らばっているんです。カトルメールはフランスの国立図書館が持っているものを使ったわけです。当時は王立図書館ですが。帝政ロシアの学者のベレジン I. N. Berezin というのはサンクト・ペテルブルグが持っているのでやったんです。そういう各地にある各時代の写本を完全に集め尽くして、それらを徹底的に比べて、クリティカル・エディションというか校訂本をつくって、そして全訳をつくって、さらにそれにかかわる研究書を出すということが可能になったのは、実はごく最近なんです。恐らくこれからですね。日本では昨年おなくなりになった本田実信先生がやろうと思われていて、しかし、ちょっと早すぎたのかもしれない。そういうことが可能な世界情勢というか、時代じゃなかったんですね。

上山 史料とかの見方がですか。

杉山 見方もですが、それ以上に原写本・古写本の写真を各国から徹底収集するという、いわば単純なハード面

で。僕が上山先生が西洋部におられたころの京大人文研・東方部に助手としていさせてもらったときに、イスタンブルに行ったり、いろんなことをやったのですけれど、それはそうした古写本の写真をおもに集めたんです。

上山 ああ、『集史』の。

杉山 『集史』とその周辺ですね。モンゴル時代の。それで大体主要なものの写真が手許に揃いました。研究のやり方としては、まさに古典学的にまずは各写本をつきあわせ、一字一字の比較検討から始めなければいけないんですよ。同時に、文章はいちおうペルシア語ですけど、中身はモンゴルのことであったり、中国のことであったり、インドのことであったり、ヨーロッパのことであったりして、結果として使われている単語はじつに様々な言語が入っているんです。

上山 なるほど。それを音写か何かでやってるわけ？

杉山 ええ。モンゴル帝国史の研究は、ふつう考えられているのとは違って、世界・日本を問わずアジア史研究のなかでとびぬけて古い伝統と蓄積があって、ひとつひとつの述語や単語についても、フランスのポール・ペリオとか、羽田亨先生をはじめ、昔から、じつにいろんな学者がいろんなことを言っています。それら全部を把握したうえで、その知識を投入しないとだめなんですよ。しかも東西に関連文献が歴大にあり、たとえば中国だけでも元刊本の元代の記録がすごくあります。そういうのを全部ぶつけていく必要があるんですね。これまでに欧米を中心にラシード・アッディーンの『集史』の部分・部分について精粗の差はまちまちにせよ、その当時としてはそれなりのものはできてはいたのですが、やはり質量ともにまだとても不十分なんです。今やろうと思っているのは全訳、それからすべての写本をもとにした最も望ましい校訂本。訳をつくるというのと研究するというのと校訂本をつくるというのは卵と鶏で、一ぺんにやっていかないとだめなんです。今、ペルシア語が読める人は、日本の若い層で相当いるんです。しかし、『集史』についてはただペルシア語を読んでいたのではやっぱり不十分なんですね。関連言語を把握し、ありとあらゆる同時代の関連文献を全部くっつけないと。

上山 それは大変だ。

杉山 ただやりがいはありますよね。それから、率直に言うと、相当修練を積んでこないと難しいです。僕は今48なんですけど、40ぐらいまでがその準備のつもりでした。そういう古写本にさわられたのは30代の後半なんですけど、40以降の仕事はこれを中心にしていこうと思って、ちょうどいい時期だったのかもしれない。ただやはり

すごく時間がかかります。易しいところはずっと行くんですけれど。

上山 大きいことだなあ。

杉山 以前に人文研で漢文の世界をのぞかせてもらったり、いろんなことをやってきたものを全部投入して、ラシードの『集史』という13世紀に初めて人類に出現した世界史について、日本で今こういうことができるよと示せばとおもいます。何らかのものをつくってしまうと、あとの人は日本人でなくても誰でも、やりたい人が修正していけばいいと思うんです。ただ、40になったとき、あと10年でやろうと思ったのですが、ちょっと甘かったですね。

上山 で、もうやり始めているわけ？

杉山 ええ。部分的には完成しているところがあります。全体の10分の1ぐらいは仕上がりました。出版社等も引き受けてやろうというところがありますので、できたところから出していこうと思っています。

上山 あなたに接する学生の中で触発される人も出てくるんじゃないですか。

杉山 触発されても、これはものすごい仕込みに時間がかかるんですよ。

上山 ああ、そうか。

杉山 それからやはり猛烈に耐久力が必要ですね。近代語を入れると、10数カ国語は読めないとつらいですよ。それから、僕らのころはまだよかったですけど、今は業績主義なんですよ。

上山 それは激しいね。

杉山 卒論、修論、博士論文を書いて、公刊論文も数本は出して就職して、30過ぎたら、さてどうかというところ……

上山 あのパターンは悪いね。

杉山 仕方がないのですが、良くないと思います。

上山 全然根が張らないね。

杉山 少なくとも古典学には良くないですね。

上山 風が来たら、ぱたんと倒れるような。

杉山 そういう点で考えますと、僕らのころは恐らく基本的には先生たちのころと同じなんですよ。ゆっくりやって、食えなくてもいいや、そのかわりじっくりしようという気分がみんなにありましたので。

上山 初めから食えないのが原則でしたから。

杉山 そうでしたよね。

上山 しかし、それにしてもうれしいなあ。こういう仕事をやってもらえるということは。

杉山 ただここ1年、あるいはここ数年、1年間の中で

その仕事にあてられた時間がどのくらいあるかというと、日数よりも時間で計れるくらいですね。その意味では、あきらめてますけど。

上山 そう。じゃあ、こんな雑用を持ち込むのは恐縮だなあ。

杉山 いえ。この対談は楽しいです（笑）。

上山 しかし、すごいことだな。ある意味で、新しい世紀の歴史像みたいなものができる糸口になる。

杉山 これは何人がやってもいいと思うんですよ。また、ちょうど日本がやるのに向いている巡り合わせなんですね。

上山 向いているでしょうね。裏と表かもしらんけど。こっちはネガでしょうけどね。何も無いという意味で。

杉山 ええ。日本における、例えば、人文研の東方部が象徴するような中国文献学、中国学の強力さというのが、実はこのラシード研究にも絶対不可欠なんです。それから、それこそ桑原隲蔵先生や羽田先生以来ずっと日本は遊牧民や、モンゴル、内陸アジアに関する研究をやっていますからね。遊牧史の伝統があります。やはりこれがないとしんどいんです。それから、世界がボーダレスになって、いろんな人と接触できるようになりました。僕も西洋人の友人はたくさんいます。そうした人たちを通してかなりコンパクトに西洋学の一番いいところを教えてくださいませんか。さらに、イスラーム学もほぼ日本で定着しつつあります。条件はちょうどそろったなということですね。

上山 例えば、今西錦司さんでも、かつて内モンゴルをフィールドにして、独自の遊牧論を展開しました。今西グループの日本ザルの研究とか、梅棹忠夫さんの文明の生態史観などは、そこから芽生えてきたと言えなくもありません。

杉山 モンゴルって不思議なところですね。

上山 こちら側から見たモンゴルのゆがんだ像というか、それに対して、この『集史』みたいなものができたという動かしづからざる反論があるわけですね。モンゴルに対する狭い見方というものに対して。それはただ蒙古族とか、蒙古民族というものじゃなくて。

杉山 人類ですね、むしろ。モンゴルというのは為政者にはなっていますけれど、直接・間接にあの政権の中に取り込まれた部分というのは人類文明のほとんどの部分・要素が入っていたということですよ。それを当時のモンゴルたちは全体像として眺め、しかも不思議なことにかなり客観的に見ているというか、他人の目で見ていますね。中国に対しても、ヨーロッパに対しても、

イスラームに対しても、インドに対しても、自分たち自身に対しても。あのクールさというのは実に不思議ですね。ですから、ラシードの『集史』の中でいろんな人々のことを書いているのですが、それは今で言うネーションじゃないんですね。人の集団を区別するとき暮らしぶりというか生業で区別しているんですよ。

上山 なるほど。

杉山 意外にエスニック・グループに近いような形で考えていまして、たとえば中国の中もいくつか切っているんです。北中国は全体ではヒタイだけれど、でも実はここの連中はこうだ。あそこの人びとはあだとか、その辺は大変クールですね。世界支配者だったからかなという気もします。また『集史』自体が国家編纂物ですから、モンゴル帝国の広がりそのままに、編纂スタッフも多国籍というか多人種なんですよ。いわば中国籍の人もインド人もヨーロッパ人も、じつに色とりどりに加わっています。御丁寧なことに、そうした編纂過程もみんな書いてあるんです。

上山 それによっていろんな異質の文明が生かされる条件ができて。しかし、生かさないと、帝国のリーダーとしてはやっていけないということがあるわけですね。

杉山 そうですね。先生のおっしゃるとおりだと思います。モンゴル世界帝国は、強力な軍力で支配したかということ、前半はそうですけど、後半は文化事業とか、経済活動とか、あるいは最近のアメリカのやり方に近いというか、政治・経済・文化をミックスしたような支配パワーですね。それを使いました。露骨な軍力だけではなくて。

上山 それは江戸時代の徳川も似たような形を取るわけですね。

杉山 徳川幕藩体制をすごく大きくしたのがモンゴル帝国ですよ。非常によく似ていると思います。

上山 そういう『集史』を背景にしながら、『遊牧民から見た世界史』のようなものを書いているわけですね。

杉山 それでないといけないです。

上山 それが僕はすごいパワーだと思う。ひどく訴える力が強くて、僕は驚いたんだけど、それと今までの『史記』だとか、ヘロドトスの『歴史』なんていうのがこういう形で文脈に入れられると、その端のほうの一環になってくるわけね。僕らにとってはあそこが基軸になるわけでしょう。中国文献分類の経・史・子・集の史の原型が『史記』にあるわけですね。ヘロドトスもそういう意味ではそうでしょうけれど。ところが、そういうふうなものが周辺化されて、周辺に、ぴったりした位置ができ

るわけです。おもしろいのは、あなたは匈奴の視点から、漢との緊張関係を非常にリアルに、そつなく書いているというか……、ほれ込んだような書き方をしている。とくに、あの匈奴伝のところ。

杉山 『史記』は武帝の匈奴作戦の中で書かれていますから、匈奴伝だけじゃなくて、いろんなところで匈奴の影が見え隠れしていますね。『史記』の全体を読みますと。

上山 なるほど。

杉山 アメリカとソ連のような冷戦じゃなくて、熱い戦争のときですからね。露骨に書かなくても、匈奴伝以外のところでも随分いろんなものが影を落としています。

上山 中国に対する匈奴の戦術と、ペルシアに対するスキタイの戦術が瓜二つだと言われてみたら、本当にそうなんだな。

杉山 全く一緒ですよ。ずっとモンゴルまで一緒です。

上山 これは、今まで僕らが歴史の基軸にしてきたものが周辺になって、逆に位置づけられるという、非常におもしろい切り口だと思いましたね。

杉山 ラシード『集史』のちゃんとした校訂本と訳が出て、かなりの人数の方がそれを読んでくださることによって、知識の土台が少し変わるかもしれませんね。僕らのような商売をやっている人間というのは、そういう基礎データの提供が本来の職分ですし、なにをおいても一生懸命やる必要はありますね。

上山 しかし、同時にこういう素人相手のものも書いてほしい。そういうことによって、そういうものに対する位置づけというか、考えるきっかけになる。そういうことをやっている人の歴史の見え方というのが非常に刺激的ですね。僕はもうちょっと若い人に読んでもらいたいと思うんだけどね。それで、こうしたあなたの本には、みんな今の『集史』が背後にあるわけですね。

杉山 そうですね。結局、ラシードの『集史』がないと、東西の文献はくっつかないんですよ。あれがあることによって、くっつくんですね。ヨーロッパから日本まで。

上山 司馬遷の『史記』とかヘロドトスの『歴史』とかを取りあげたのは、特にそういうものを拾って読んだわけじゃなくて？

杉山 僕は学者の家の出ではないんですが、なんとなく家にいろんな本がありまして、『十八史略』とか『史記』は大体小学校ぐらいに読んでいました。ヘロドトスは松平千秋先生の訳が高校のときに筑摩で出たんですね。それですごく興奮して、2・3日、徹夜してずっと読んで、その印象が強いですね。やはり僕らは読者の世代なんで

すね。『史記』にしても、訳注等が出始めていましたから。初めから『史記』の原文は無理ですよ。小さいときのイメージで、子供のときに読み物として読んでいて、こういう文献学者の世界に来て、ラシードみたいなものに当たると、ある言い方をすれば、似ているんですよ。文献の中身や時代そのものの大きさはちょっと違いますが、どれも世界史ですから、その時点での。モンゴル時代というのはユーラシアが東西につながりましたので、あの時代でその前と後ろを見ると、見やすいですね。この『遊牧民から見た世界史』は、看板に偽りありで、じつのところ後ろをほとんど書いていませんが、いつかモンゴル以降の時代というのを一度は書いてみたいなど思っているんです。ともかくモンゴルまでの歴史というのは、ラシードの『集史』の仕事を通じることで、これのもとは何、何、何とさかのぼっていくと、ずっと太古まで行きます。それも東西の各地域について。だから、見晴らしがいいんですね。峠みたいなもので、周りが見えちゃうんです。

上山 『集史』が書かれたのは何年から何年までですか。

杉山 編纂は1295年から1310年です。

上山 短い期間につくったんですね。

杉山 でも、もとのものはいろいろあるんです。まだわかっていませんが、例えば、ヨーロッパ史について、種本はあったはずなんです。中国史は種本に限りなく近いものまで、接近しつつあるんです。完全に種本ではないですけど、ほぼ似たものがわかってきました。それから、モンゴル帝国ができてくるあたりのデータというのは、世界中からかき集めていますね。国家編纂物だし、時代と地域を超えた一大歴史書というところがありますね。それだけ難しいと言えれば難しいんですけど、逆にネタ本を探ったり、似たデータを溯っていくと、自然とモンゴル時代に来るまでの道というのがトレースされていくような感じなんですね。

上山 先ほど、客観的にいろんな文明などを見る目がモンゴルにあると言っておられましたね。

杉山 あまりモンゴルは自分たちにこれというものが無いからかもしれませんが。

上山 そこはちょっと日本と通じるところがあるのかしらね。ああ、それと、もう一つ。系譜みたいなものについて書いていましたね。

杉山 ええ、『五族譜』と訳していますが、世界の五つの主要種族の系統図なんです。大体は歴代の王統図なんですけど。

上山 それがビジュアルだとおっしゃっていましたね。

杉山 ええ、ビジュアルです。ぱっと見てわかるようになってるんです。例えば、中国では、一番最初は伝説の巨人の盤古から始まって、堯、舜、禹とずっと来て、歴代の王様を全部書いてあるんです。各ページを貼って伸ばしていけば、10何メートルかになるんじゃないですか。

上山 ほう。

杉山 恐らくはモンゴルたちはそうした一枚ものの世界王統図を壁などに掛けて、見ていたんじゃないかと思うんです。

上山 それは『集史』とパラレルのところはあるんですか。

杉山 あります。内容的にはほとんど重なっています。

『集史』は挿絵と文章なんですね。一方、こちらは系図集なんです。例えば、ヨーロッパはローマ教皇とローマ皇帝の歴代が二頭立てでずっと書きつらねてあります。

上山 ところで、あなたの場合、古典学でしょうけれど、ちょっとほかの古典学と。

杉山 違いますね。

上山 リアリティとのかかわりというものがもうちょっと重い意味を持つ点もありますでしょう。

杉山 ですよ。

上山 しかし、差し当たりこの『集史』の翻訳ということは典型的な古典学...

杉山 と思います。

上山 複数の古典学を踏まえないと、それが突らないという面があるんですね。

杉山 ええ。いろんな古典学の伝統があるおかげでできることですね、逆に言えば。接着剤みたいなものだと思います。

上山 やむを得ず比較古典学になるわけですね。それは比較古典学とは言えないかな。

杉山 ある程度のノウハウはそれぞれの文明圏の古典学について知っていないと摂取できません。やはり中国学とイスラーム学というのは本質的にはすごい距離があるんですよ。

上山 ああ。今イスラーム学とおっしゃったけれど、モンゴル学はイスラーム学と重なるわけですか。

杉山 モンゴル時代史はそうです。その後の巨大帝国じゃなくなってしまって、小さくなったモンゴルはまた別ですね。

上山 ああ、そう。そこは視野からはずすわけ？

杉山 いや、それをやっているとちょっと……。それは別の方たちのほうができると思うんですよ。

上山 世界帝国としてのモンゴルと同時にイスラーム文

献...

杉山 であり、やはり中国文献のウエイトも大きいです。それから、ヨーロッパはルネサンスですから。やはり、ヨーロッパの存在は大きいですね。モンゴルとヨーロッパとの交流というのも、例えば、国書というんでしょうか、国家間、政権間での交換書簡が相当あるんですよ。文献学者としては楽しい時代ですね。

上山 それは『集史』の中に織り込まれているわけ？

杉山 織り込まれているものもあります。そうではなくて、現物がヴァチカンに残っていたり、ウィーンにあたりたり、イスタンブルにあたりたりですね。じつは、そういう国書と同じやり方で、わかりやすい漢文にしたのが、元寇のときに日本が受け取った国書であったりするんです。あれは単なる漢文として読むとちょっと具合悪いんです。もとのモンゴル語と漢文が裏表になっているような、ある種の官製用語みたいな言語で書かれているんですね。東は東大寺に写し本がある元寇のときの国書から、西はパリが持っているモンゴル皇帝が出した、ペルシア語やモンゴル語で書いた国家書簡まで、じつは一連の脈絡のなかでとらえられるものですね。

上山 そういうものをリストにしたものはないのですか。

杉山 今つくりつつあります。

上山 おもしろいでしょうね。そうすると、例の元寇の国書についても漢文だけで読んでいたのと意味が少し...

杉山 違ってきます。しかもおもしろいのは、そうした命令文書というか、国書というか、ある種の文書スタイルと文書システムがモンゴル帝国のときに一旦でき上がりましたから、その後の明、清とか、ティムール朝、ムガル朝、ロシア、オスマン朝などにも影響を与えましてね。外交のやり方とか書簡の書き方も実はモンゴルの影響があるんですよ。これは今まではほとんど意識されていないんですけど、今後はかなり可能性のある時代・地域をこえた歴史分野になると思います。といっても、その前にとにかく集めるというのが大変なんですけれど。

上山 そうでしょうね。

杉山 それでソ連が壊れたというのはありがたいですね。ラシード『集史』の古写本写真の収集にもいいんですけど、それ以外のもろもろの写本、文書の収集において。データを握って外へ出さないという性格の政権が崩れたというのは本当に壁が消えたなとおもいます。

上山 今は接近しやすくなりましたか。

杉山 ええ。求めればほとんど得られます。むしろ怖い感じがするほどです。(終了)